

学会企画シンポジウム3

学校臨床におけるアセスメントの活用と限界

—ICD-11による疾病・障害と特別支援教育・教育相談—

企画・司会：橋本創一（東京学芸大学） 企画：小野瀬雅人（聖徳大学）
話題提供：小谷裕実#（京都教育大学） 話題提供：杉森伸吉（東京学芸大学）
話題提供：小野昌彦（明治学院大学） 話題提供：芳川玲子（東海大学）
話題提供：畠垣智恵（静岡大学）

キーワード：特別支援教育・ICD-11・アセスメント

【企画趣旨】

WHO（2019）によるICD-11（国際疾病分類）が発表されて、様々な疾病・障害に関する診断基準や枠組みなどが改訂された。これを受けて、学校教育現場における児童生徒の実態を捉えなおし、対応・支援を見直すことが迫られている。具体的には、ネット・ゲーム障害、不安障害、自閉症スペクトラム、軽度知的障害、学習障害、性自認・性指向、などといった新たな疾病・障害に対する特別支援教育や教育相談における理解が求められている。

また、学校臨床の心理教育的援助サービスにおいて、疾患・障害に加えて、学校不適応や支援が必要な状態などにある児童生徒らが増加している。いじめ・学級崩壊、不登校、発達障害や学習困難のある児童生徒の支援ニーズの把握や評価であるアセスメントが重要視されている。そこで、指導・支援への展開をみすえた様々なアセスメント法（質問紙法〔集団、人間関係など〕、行動観察法〔行動や情緒など〕、個別検査法〔学習、認知機能など〕）の活用の紹介を通して、その有用性と限界について、あらためて確認し、その上でどのような実践が有効かについて討論する。